

## ここ／そこ／どこか——もの派以降の芸術における場

本論文は、1960-70年代日本の美術動向「もの派」を、〈ここ／そこ／どこか〉という場所性の問題で再解釈し、同一システムで把握できる「もの派」以降から2000年代に至るまでの作家・作品を、統一的に論じたものである。

1章では「もの派」の成立過程や背景、思想を要約しながら「もの派」理論を分析している。そこでは「もの派」を李禹煥—菅木志雄という構造へ圧縮し、再構築することを試みている。1章の焦点は、李や菅に共通する東洋的語法や観念的経験の記述を、可能な限り人間（観客）の〈見る〉経験で記述し直すことである。

2章では1章の知見をもとに、「もの派」作品を分析している。ここでは作家の行為と観客の経験という二つの視点から、「もの派」作品を考察している。分析は1章で浮き彫りになった、作品における観客の不在を検証するかたちで進められる。

3章では、「人間と物質」展を「もの派」思想を引き受けたものと位置づけ、作品を中心に論じている。そこでは「もの派」の問題意識が日本固有のものではなく、当時の国際的な問題意識に起因した、〈ここ／そこ／どこか〉をめぐる問いであったことが考察されている。リチャード・セラの作品は3章の特異点として論じられ、セラを通して作品の〈場〉化、〈つくられたもの〉の背景化を提唱している。セラの《シフト》を介して、分析は「人間と物質」展から離れ、メディアが〈ここ／そこ／どこか〉を思考するための重要な要素であることが論じられている。

4章では、3章までに継続して見られた知見を断絶させる「ポストもの派」に触れ、その上で田中功起の「ネオもの派」発言を足がかりに、前田征紀と木村友紀を論じている。前田と木村は「もの派」・「人間と物質」展からの直接的な影響は見られないが、1～3章の知見が交わる点を示す作家と言える。分析では〈つくられたもの〉が「もの派」の物質と同様の仕方で行われていること、メディアの特異性、そして作品によって現出する独自の〈場〉について論じられている。